

茶

Aブロック全作品と講評  
[www.columnland.net](http://www.columnland.net)

伊藤「おーい お前キヤラ変わったね」

伊右衛門「最近濃くなったかな」

## 靈界からの音楽

ローズマリー・ブラウンという音楽霊媒師をご存知だろうか。信じられないような話だが、リストやシューベルトといった音楽の巨匠たちの霊が彼女と交信し、死後作曲した作品を彼女に託したというのである。

ブラウンはロンドンに住む平凡な主婦だった。音楽的才能はほとんどなく、ごく平易な聴音もできなかったという。しかしピアノは大好きで、暇さえあればピアノに向かい鍵盤の上でたどたどしく指を走らせるのが彼女の趣味だった。

ある夜、いつものようにピアノを弾いていた彼女に異変が起こった。自分の意志で指が動かせなくなり、何者かが乗り移ったかのように突然見事な演奏を始めたのだ。それまで踏んだこともないペダルをも巧みに操りながら。

その時、ブラウンは子供の頃見た白昼夢を思い出した。少女であった彼女の前に白髪の老人が現れ、

「君が大人になったら、私がピアノを教えてあげよう。」  
と約束して消えたのである。ブラウンは後年肖像画を見てその老人がフランツ・リストだったことを知った。彼女はリストがその時の約束を果たしに来たのだと疑わなかった。リストの亡霊はブラウンにピアノの演奏法を教えるだけでなく、彼女を通して生前発表できなかった作品を世に出そうとさえた。何度も何度も彼女の手足を操って演奏し、彼女の体が完全にその曲を記憶するまで繰り返し続けたのだ。

その後リストの他にも、シューベルト、ブラームス、バッハ、ラフマニノフ、グリーグ、ドビュッシー、ショパン、シューマン、ベートーベンといった大作曲家たちの亡霊も、ブラウンのもとへ現れては未発表作品を伝授するようになった。シューベルトは未完成だった交響曲の後半部分を、ベートーベンは第九番までしかない交響曲の第十番を彼女に託したという。

それらの曲にはその作曲家との類似点があつきりと見出されるし、憑霊中のブラウンの演奏のタッチやルバートの調子は明らかに十九世紀風であったという。しかし、作曲家が晩年に至って到達した境地がその曲に現れているとは言い難いと唱える音楽学者もいる。それらが本当に作曲家の死後の作品なのか、それともブラウン自身による作品なのかは分からない。しかし少なくとも、作曲家たちの亡霊から教わったと彼女が信じていたことは事実といえるだろう。

VERY SWEET!

茶色の流動体を型に流し込む。

よし、上出来だ。まあ、もともと私は料理ができるし、初回でもない限り大きな失敗なんてありえないんだけど。ともかくこれで、ゆつくりと冷やして、飾りつけでもすれば完成。素人が作った割には美味しく出来上がるはず。だから――

――私は、ありったけの砂糖をぶち込んだ。



「料理の腕とお菓子作りの腕って、関係ないんだね……。」

今年もまた失敗した私に対して、甘党の処理役が苦い顔を浮かべた。

「今年は材料も一緒に買いに行っただけ……どうということなの……」

「ほら、私って感覚で料理を作るタイプじゃない？お菓子作りってなんだかカガク実験っぽくてさ、どうもうまくいかないのよね。」

「また失敗だつていうのに、なんだか余裕だね。最初の年はマジ泣きしてたくせに。」

「そういうば、そんなこともあったわねえ。」

思えばあれが始まりだった。好きな人に告白しようと思つて此奴に作り方を教えてもらつて。砂糖の量を間違えたことに、よりにもよつて朝に学校で気づいて。

「軽く言うけど、あの時僕は大変だったんだぞ？キミがあんなに狼狽するとこなんて見たことなかったし、宥めるのにどれだけかかったか。」

「私は記憶力が悪いのよ。過去の失敗なんて、あつという間に忘れて見せるわ。」

「せめて分量くらいは覚えてくれよ！」

そう、私は忘れっぽい。その瞬間、好きだったはずの人を忘れて、新しい人を好きになつてしまつたくらいに。

「しかしまあ……多少、かなり甘くても手作りチョコだろ？キミみたいな娘に本命の手作りチョコなんてもらつたら、普通は喜ぶだろうし……」

「失敗した過剰な砂糖のチョコなんてものをあげられるのは、今のところあんただけよ。やっぱり、相手が喜んでくれる甘さのものをあげたいじゃない♪」

## 夏の終わり

あれだけうるさかった蝉の鳴き声も、今ではもう物足りない位に静まり、季節の変わり目を感じさせる。また、この季節が来たのだ。

3年前、僕は彼女と別れた。いや、「別れさせられた」と言った方が正しいか。

お茶目。

それが彼女を形容する言葉として最も適切だっただろう。いつでもどこでも明るく、元気に振る舞い、おどけてばかり。周りまで元気にさせる彼女の事を、僕はまるで太陽のようだと思った。

それに引き替え、僕は引っ込み思案で、人見知り。彼女が太陽なら、僕は月だっただろうか。  
だから僕は彼女に恋をした。人生で一番くらいの勇気を出して、告白もした。絶対にダメだと思っていたから、彼女が本当に嬉しそうな顔をして、らしくなく目に涙まで浮かべて、「ありがとう、ホントにありがとう」と言ってくれた時は、気が動転して、頭が狂ってしまったし、まいそうだった。それだけ幸せだったのだ。

しかし。

それからたったの1か月後、僕達は別れることとなった。

その時の絶望感。

それはどれだけだっただろう。分からない。

太陽をなくした月は、どうやって輝けばいいのだろうか。

それから毎年、この時期に、僕は彼女と会う事になっている。

本当は、彼女と会うのは今でも辛い。その事実を認めたくなくて、目を逸らしたくなる。

しかし、それではダメなんだ。

彼女の幻影にいつまでもすがって生きる訳にはいかない。

僕は彼女の前で手を合わせる。

彼女の墓はいつも綺麗に手入れされていて、ピカピカだ。

死後もなお輝き続ける彼女に会うことで、僕は彼女からエネルギーを貰う。

「住職さん、いつもお掃除お疲れ様です〜！」

僕は茶目っ気たっぷりに、挨拶をする。まるで彼女のように。

彼女の残り火は分けてもらった。

今度は僕が一人で輝く番だ。

僕が輝くことで、彼女の生きていた証を残せる。その輝きに照らされて、誰かもまた輝きだす。その輝きも、また誰かを。

彼女の火は、永遠に尽きることはない。

## 天下一茶道会決勝戦

久しぶりだな、サウザンド利休よ。こんな形で戦うことになるとは思ってもなかったぜ。

我が『わび茶』は極限まで無駄を省いた茶の湯の極致。ミレニウム利休よ、お主にこれを超えられるか？

まあ味わうがよい。いでよ！ 我が究極の茶、『一日の紅茶』！

こ、これは……っ、紅茶だっ！

そうさ、これが俺の至高の茶。そんじよそこの茶と一緒にするんじやねえぞ。改良に改良を重ね、午後だけでなく一日味わうことを可能にした、最高の茶だ。

(くっ、この輝き！ すさまじい圧力だ……っ！ だが、しかし……)

お主！ とうとう紅茶なんぞに手を出しよって！ 魂を売ったか……！！

これだから古い考えの人間は。無駄を一切なくすことは美德ではない。それは、ただ、新しい物を拒絶しただけの進化の放棄だ。新しい、よりよい物を取り入れてこそ、茶は進化したといえるもの。それがわからないようなら貴様の茶に未来はない。

そうら、喰らいやがれ、奥義「ダブルインパクト茶葉二倍」。

ぐああああああああああああああああ……！！！！！！！！

ハッ、貴様ごときが俺に勝とうなんて千年早えんだよっ！

……なに？ 貴様！ なぜまだ立っついてられる……！！

ハァーハァー……簡単なことを……。お主の茶には……心が、こもっていないからだ……。いくら最高級の品をそろえ、最新の技術で入れても、そんなものはただの寄せ集め。誠心誠意、真心をこめて入れた茶に敵うはずがなからう。

ふざけたことを言うな！ 進化を諦めた貴様の茶に俺の茶が負けるというのか！

ふん、わからなくともよい。代わりに教えてやろう。私の本気を。私の茶を。

# 茶色のお弁当

母のつくるお弁当はいつも茶色だった

汚い色だし友達に見られるのが恥ずかしくて

いつも一人でお弁当を食べていた

ほんとは見た目なんて関係ないくらいおいしかったけど

照れくさくておいしかったなんて言えなかった

逆に、もっときれいにつくってなんて

喧嘩をしたこともあった

一人暮らしを始めた今、自分でお弁当を作っている

母に近づけたのは茶色の見た目だけ

いつかはあの味に近づぐことができるのかな

私は緑茶を淹れることについては自信がある

目の前には急須、茶葉、茶碗

血がたぎるのを感じる

茶が私を呼んでいるような

ある種の催眠状態に似た感覚が襲ってくる

•••

無意識のまま茶を淹れはじめ

水道水を沸騰させ塩素をとばし、温度調整のため沸騰したお湯を茶碗に注ぎ、さらにそのお湯を急須にいれ、そしてその湯を湯さましのなかに、上級煎茶を淹れる最適な温度は大体七〇度くらい、うまみ成分をひきだすため、少し低めの温度で、茶葉を急須にいれ、茶葉をお湯に六十秒から一二〇秒浸し抽出、茶を茶碗に注ぐ

•••

茶が出来上がった

ほのかな香りが鼻孔をくすぐる

茶碗に手を伸ばす

ゆっくりと茶碗を口元に近づける

そして茶が口にふれるや否や

「パンチン茶茶茶茶茶茶」

「思わず叫んでしまった、やっぱアツくなると良くないな、淹れなおそ」

何茶って

隣の席である君が茶道部に所属しているようで、僕は、昼休みに誰もいない茶室で君のお茶をいただくこととなった。そこまで君と話したことはなかったけれど、日本人として一度でいいから抹茶を楽しみたいと申し出たのである。

君は三角形に折られた赤い絹の布を、パンと打ち鳴らしてから器用に折り畳み、黒い漆塗りの丸い入れ物を拭く。全く茶道に関して知識がない僕は、お茶は粉を入れてお湯でシャカシャカやるだけだろうと思っていたのだけれど、意外と準備段階から様々な手順があり、興味深いものだなあ、と漠然と考えていた。

緑の黒髪を静かに携えながら、君はその布を畳み直し、今度は耳かきのような小さな棒を拭く。優雅にお点前を進めていく君は、綺麗だ、と素直に思った。美人なのに、いつもは無感情、むしろ不貞腐れたと言っても過言ではない表情と、人を寄せ付けない雰囲気携える君だが、お茶を点べている今、心なしか楽しそうに見える。何だかそれが、訳もなく嬉しかった。

その時だった。僕の体に僅かな痛みが走った。自覚するや否や、全身にその感覚が力を持って伝播する。伏し目がちにゆっくりお茶を点てるその横顔が窺えて、息が詰まりそうになった。

僕は、思ったことはすぐに口に出すことを信条としている。善は急げともいうし、言葉とはその時その時の感情を瞬間冷凍して相手に届けるものだと思う。けれども今回の場合、君はとも幸せそうにお茶を点べているし、状況が状況だけに、発言するのが躊躇われた。

それからどれ位たったのだろうか。気が付くと僕の前に風流な香りを持つ抹茶が出されていた。大きな瞳で真っ直ぐ見つめる君の視線に射抜かれて、僕は何故か罪悪感を覚える。君に飲み方を教わり、そっと口に含むと、心地よい苦みと、君の普段見えない優しさが広がっていった。

もしかしたら僕の一言で、君との関係を壊してしまうかもしれない。親しい、と言えるかどうかかわらないけれど、いつもは人と話さないにも拘わらず、僕が話しかけると短くても返してくれるのに、少なくとも嫌な気はしていなかった。

細やかな二人きりのお茶会を、僕は幸せに思う。

けれどももう限界だ。これ以上、この感覚を抑えることは出来ない。体は軋んで、声も出せなさそうだった。迷いが断ち切れた訳ではない。それでも、僕は、自分の胸中を、ありのまま、君に告白する決断を下した。

「…………ごめん、足痛いんで、正座崩してもいいかな？」



目の前には真っ茶色の空間が広がっている。

他には何も見えない。

だけどだんだん視界が開けてきて何かが見える、あそこに人がいる、誰だろう？

あっ！ あの娘・・・・・・・・

彼女は僕に微笑みながら近づいてきて、楽しそうに話しかける。

僕もついつい楽しくなり、話を弾ませる

何が起きたんだか僕には分からない、でも嬉しい！

やがて平日は毎日学校と一緒に通い、週末はデート、そんな日々を送るようになる。

今日もいちゃいちゃいちゃいちゃ・・・

ふいに彼女が僕に抱きつく。

視界いっぱいには彼女の髪の毛のブロンズが広がる。

再び目の前は真っ茶色に・・・

熱い熱い苦しい苦しい・・・・・・・・

# ガバツ！

次の瞬間には真っ白な教室に真っ茶色な机が並んでいた。

『茶色い幻影』

## 今こそ学問の力を

真実とは何であろうか。あちらこちらに転がっている命題のうち、何が「真」で、何が「偽」なのであるか。こんなことを考えていてもきりがない。しかしそのようなことは重々承知の上で、今日も真実を求めて探求を続ける学者たちが世界中にいる。技術がいくら発展しようとも、まだ人間には判り得ない真実は多く残されており、そのひとつひとつを解明していくべく、学者たちの「知の探求」は続く。

○ 私はその中から、とある日本人の学者の探求に注目した。彼が解明しようと試みている真実は、日本人、こと東京に住む人々が長年抱いてきた疑問を一気に解決してしまうようなものである。それゆえ、彼の探求は極めて困難なものであり、解明までに相当な時間がかかると思われているものであるが、近年注目を集めている研究のひとつである。

○ 東京にお茶の水という場所がある。大学や楽器屋、予備校などが立ち並ぶため若者も多く、活気あふれる街である。しかしそのお茶の水を巡って、人々は長年議論を交わしてきたが、未だにその結論に至っていない問題がある。それは『お茶の水』は『お茶』なのか『水』なのかということである。そう、前述のとある日本人学者の

研究は、長年日本人を悩ませてきた「お茶の水論争」に終止符を打つべく行われているものなのである。

○ 両者の主張を簡単に紹介しよう。『お茶派』が最大の根拠としているのは、お茶の水の略称である。お茶の水になじみの深い人々は、お茶の水を「お茶」と略して呼ぶのが通例なのだ。お茶の水女子大学を「お茶女」と略すのもその一例である。この略称は長年に渡って使用されており、それゆえに『お茶派』は、お茶の水のルーツに『お茶』を見出したのである。対する『水派』は、「お茶の水」の文法的解釈をその論拠としている。「お茶の水」の「の」は、所有格を表す格助詞であり、それを踏まえる「お茶の水」は『お茶が所有するところの水』であり、つまるところその本質は『水』なのである、と解釈できる。

○ 近年、「お茶の水論争」は徐々に激化してきている。TwitterやFacebookの普及に伴って両派閥とも勢力を拡大しており、このまま勢力の拡大が続けば、東京、ひいては日本が大きく二つに割れる大論争、最悪の場合は内戦にも繋がりかねない。思想の違いによる対立は過去にも多くの例があるが、私は今こそ学問の力を信じたい。「お茶の水論争」の平和的解決を目指して研究を進めるとある日本人学者に今後注目したい。



コンテスト結果

[Aの部]

コラム番号	コラムタイトル	点数	順位	特別賞
		まじょコメント		
A01	無題（伊藤/伊右衛門）	10 pt	4 位	2 sp
		<p>シンプルに、すんとツボを衝いてきました。まさに表紙のための作品。クリーンヒットで4位です。</p> <p>特別賞：生茶も入れてあげて賞（かわいそうだから）濃い目の賞（濃くなったから）</p>		
A02	霊界からの音楽	5 pt	7 位	1 sp
		<p>2番、正統派粹入ります。しっかり調べて、きちんと分かりやすく組み立てた王道正統派。慎重に断定を避けるなど、書き手さんの誠実な仕事ぶりが光ります。</p> <p>人智を超えた何か、音楽という霊的なものだからこそ、ふっと信じたい気持ちにさせられますね。</p> <p>特別賞：まさかのブラウン賞（名前が「茶」だから）</p>		
A03	VERY SWEET !	0 pt	11 位	0 sp
		<p>あまーい！ TA一同絶叫身もだえ！でも残っちゃいました。</p> <p>わざと失敗してるよね、確信犯くん。</p> <p>この恋、実るまでに処理役くんが、ぶくぶくに肥え太ってしまいそうですけれど、いいの？</p> <p>イチオシフレーズ：「私はありったけの砂糖をぶち込んだ。」</p>		
A04	夏の終わり	9 pt	5 位	0 sp
		<p>残り火が受け継がれてゆくというラストのイメージがとてもうつくしく心に残りました。</p> <p>悲しいストーリーなのに、すっきり浄化された仕上がりが好印象です。死者へ香華を手向けるって、輝きを受けとることなのですね。墓標の輝き、いつまでも。</p> <p>イチオシフレーズ：「彼女の火は永遠に尽きることはない」</p>		
A05	天下一茶道会決勝戦	13 pt	3 位	1 sp
		<p>わはははは。ノリ最高です！</p> <p>サウザンド利休何それ？とノッケから驚掴みにされ、一日の紅茶にダブルインパクト、ぐいぐい押しまくられて、ラストで奥義披露。</p> <p>けっこうなお点前で、ブロンズ・メダルとイチオシフレーズ大賞ゲットです。おめでとう!!</p> <p>特別賞：サウザンド利休賞（サウザンド利休過ぎる）</p> <p>イチオシフレーズ：「珠光の教え」「熱い熱い（←5に対して） 苦しい苦しい（←9に対して）」「茶葉二倍（ダブルインパクト）」×4「サウザンド利休」×2「一日の紅茶」</p>		
		3 pt	9 位	0 sp
		見た目より味ってこと、たしかにありますよね。懐か		

A06	茶色のお弁当	<p>しい味ほど、そんな傾き。 ほんのり郷愁を誘う話題提供でした。 茶色いおかずって何だろう。肉じゃがとかきんぴらとかなのかな。お料理の話題って具体的にすると、より共感誘いやすいですよ。</p>
A07	何茶って	<p>0 pt   11 位   0 sp</p> <p>じんわりと展開して、すぱんとはじけてオチ。運び方、王道です。 豆知識的に、お茶の淹れかた伝授も兼ねているのが新しい工夫として光りました。 そうそう、TAさんが全員「嗚呼」の「嗚」の字を、今まで「嗚」だと思い込んでおられたのは秘密です。カラスだからね。 イチオシフレーズ：「何茶って」×2</p>
A08	告白	<p>14 pt   2 位   0 sp</p> <p>ふたりだけのお茶席のはりつめた緊張が、ラストでぷつり。 オチは（たぶん）みんなの予想の範囲内なのだけれど、お点前の所作など、描写の細やかさで、くつきり彼女の魅力が引き出されています。 なぜだかTA陣との波長がみごとにシンクロするこの作者さん、勢いが止まりません。 作者バレをものともせずシルバー・メダルです、おめでとう!!</p>
A09	午後のカフェテラス	<p>7 pt   6 位   6 sp</p> <p>甘い連打で行きましょう。 こちらは、もっと過激。なにしろ口移しですからね。しかも窓際席で。 どこまでエスカレートするのか、未おそろしや。命はたいせつにね。 案の定、フロアは大沸騰、めでたく今週の最多特別賞です。美咲ちゃんによろしく。 特別賞：美咲賞（美咲かわいい）激甘で賞（爆発しろ!!毒入りだよw）リア充爆発しろ！賞（読んでて辛くなるくらい）妄想乙!!賞（あまりにもありえないので、逆にさすががしい）イヤー君賞（イヤー君に聞いてください）俺達の期待を返せ!!賞（9 10 11同時受賞 9,10の連携がすばらしい.11はおまけ） イチオシフレーズ：「熱い熱い（←5に対して）苦しい苦しい（←9に対して）」「今日の紅茶は美咲の香りがした。」</p>
A10	茶色い幻影	<p>3 pt   9 位   1 sp</p> <p>夢オチ上等。色で妄想を結びつけたところが工夫でした。 それにしても、カタイ机が、ふわふわブロンズに見えてしまうなんて、かなりお疲れのもようです。おだいじに。 特別賞：いろいろつつこみどころまんさいで賞（ディスリでいちばんもりあがった。作者さんゴメンネ笑）俺達の期待を返せ!!賞（9 10 11同時受賞 9,10の連携がすばらしい.11はおまけ）</p>
		<p>4 pt   8 位   4 sp</p> <p>もっともらしく学問論争でっち上げ。両者の主張バト</p>

A11	今こそ学問の力を	ルがおもしろい。 小さな話題をわざと大きな器に乗っけてみる。楽しさ全開のお茶の水博士、特別賞もたくさんもらって、なんといっても登場のタイミングが最高でしたね！ 特別賞：とある賞（とある学者って誰だよ）書記の私 が個人的に好きで賞（最後の最後までこの作品をおしたのですがね。ベスト3に入らなかった）どっちでもいいで賞（どっちでもいい）準正統派賞（正統派と見せかけて実はくだらない。）俺達の期待を返せ!!賞（9 10 11同時受賞9,10の連携がすばらしい.11はおまけ） イチオシフレーズ：「お茶の所有するところの水」
A12	茶の茶話会	22 pt   1 位   0 sp ラストはお茶さん達オールスターズキャストでの賑やかトーク。 颯爽と登場したはずの麦茶くんのかわいそうな末路に大爆笑です。 おあとがよろしい今週の裏表紙でした。 やりましたね！甘いがたくさん蹴散らして、ゴールド・メダルの獲得です。麦茶くんの首にかけて「金の麦茶」にして差し上げてください。 イチオシフレーズ：「オウノオオオオーーーー」

[Bの部]

コラム番号	コラムタイトル	点数	順位	特別賞
		まじよコメント		
B01	今日の運勢	1 pt	12 位	0 sp 茶柱という、とても身近な現象に目をつけた観察眼が光る今週の表紙です。 そういえば、今どき珍しいのかも。手の中の湯呑みの小さな偶然に夢を託した先人たちの智慧に思いを馳せました。
B02	「~軒茶屋」の名前の由来	3 pt	9 位	1 sp 2番、正統派粹入ります。 地名に着目。そのユニークさが◎。 そして、とてもていねいに調べて日本全国豆知識ゲットのお得感を提供してくれた緻密な仕上がりにも◎。 まとめもちゃんと添えて、重厚堅実な仕上がりです。この調査スキルは、さすが6類！ 特別賞：正統派賞（正統派だから）
B03	お茶たちのつぶやき	2 pt	10 位	0 sp 広がりすぎたがゆえに、もとの意味が忘れられたり拡大したり。 そんなミスマッチをさくっと笑いに仕立てて、とても読みやすいレイアウト、いい仕事ぶりでした。
B04	雨と木と土	2 pt	10 位	1 sp 一枚の絵から不意打ちのように蘇ってくる過ぎ去りし日々。こまやかな描写で、しっとり伝わってきます。 たぶん出さないのかな、この手紙。 特別賞：送ったほうがいいで賞（未練は残さない方がいいよ）
		17 pt	1 位	4 sp 史実をもじった狙いgood。インディアンコスプレとか、こまかいところまで行き届いた仕上がりで、キャッチコピーもぴたりはまっています。 こんなにじょうずに誘ってもらえたら、お祭り騒ぎに参

B05	Boston Tea Party	<p>加したくなりますね。歴史を変えるお祭り騒ぎなら、なおさら燃えます。</p> <p>歴史好き(?)のBブロックで大ヒット、おめでとうゴールド・メダル!!!</p> <p>特別賞：ユーモア賞(ぜひ参加したいから) 櫻井賞(ひみつの嵐ちゃん) ぜひ参加しま賞 歴史は苦手な賞(5/11同時受賞 我々の班は歴史が苦手だから)</p> <p>イチオシフレーズ：「ボストン港をティーポットにしよう」</p>
B06	混ぜるな危険!	<p>17 pt 1位 3 sp</p> <p>すごい! こんなマジックができちゃうんだパチパチパチ。</p> <p>グレートなアイデアを、よけいな説明いっさい抜きでシンプルに視覚的に見せて、実験大成功!</p> <p>あざやかなお手並みに満場の拍手です。おめでとうゴールド・メダル!!!</p> <p>特別賞：「茶」を使って欲しかったで賞(茶の字だけそのままがかわいそうだったから) 混ぜま賞(よく考えました) よくみつけたね賞(よくみつけたと思った)</p> <p>イチオシフレーズ：「滅茶苦茶」×2</p>
B07	無題(縁側でお茶)	<p>5 pt 8位 1 sp</p> <p>いいなあ縁側でほっこりお茶。誰しも憧れる理想の老後イメージでしょう。</p> <p>寄り添った茶柱が、しあわせ感をくっきり具体的に見せてくれます。</p> <p>これだけのボリュームの文章だったら、やっぱりタイトルは欲しいところ。</p> <p>特別賞：せつないで賞(せつないです)</p>
B08	古風な夏唄	<p>8 pt 4位 2 sp</p> <p>時間の飛びっぷりがスゴいですね。つきあい始めてから、あっという間に一生が終わって、なんと来世へ。</p> <p>ラップに乗せて気分よく、その夏らしいはじけっぷりが爽快です。</p> <p>つちのこ大ヒットで、みごとイチオシフレーズ大賞です。おめでとう!!</p> <p>特別賞：ラップされた賞(みごとに古風なラップだから) 古風で賞(笑)(そのまんま)</p> <p>イチオシフレーズ：「イケイケつちのこ」×6 「Yo! その可愛いネエちゃん俺と一緒にお茶をしねえか」×2 「二つの充実したsoulは～」</p>
B09	無題(髪染め)	<p>8 pt 4位 1 sp</p> <p>北海道かな、飛行機だし、お母さん方言じゃないし——などと想像しました。</p> <p>都会で背伸びした外見。さっぱり捨ててしまえば、いっそすがすがしい。体験談として一人称で語ることで、説教くさくなく伝えることに成功しています。</p> <p>特別賞：深イイ賞(深イイよね)</p> <p>イチオシフレーズ：「皆はあんたの髪の色なんかじゃなくて中身を見てんだよ～」</p>
B10	赤茶色の世界で	<p>6 pt 6位 0 sp</p> <p>あたたかも、はやぶさ。</p> <p>火星探査機の孤独と使命感。</p> <p>アームストロング船長だけが偉大なんじゃないよと、声高に自らの手柄を吹聴したりしない無数の探査機たちの〈思い〉へと誘ってくれます。</p> <p>宇宙的静けさのなかに置かれた格調高いフレーズたちで</p>

		した。 イチオシフレーズ：「しかし、私は歩み続ける」
		15 pt                      3 位                      2 sp
B11	権力者はなぜ金色を好むか	金閣をからめたところがワザですね～。 歴史いじりの賑やかさ、とても親しみやすいTV番組の気分で伝わってきます。 それにしても先週以来歴史物、ちょっとしたブームでしょうか？ ネタの宝庫ですからね。未履修のかたがたも、どしどしお持ちくださいませ。 「金」とはいかなかったけれど、ブロンズ・メダルの輝きです。おめでとう！ ナイスアシストの義満さんによるしく。 特別賞：義満の登場が良い賞（義満の登場、ADのツッコミがよい）金閣寺で賞（えっ、呼んだ？）歴史は苦手 賞（5/11同時受賞 我々の班は歴史が苦手だから） イチオシフレーズ：「権力者はなぜ金色を好むか」
		6 pt                      6 位                      0 sp
B12	茶葉のおもい	気分は祇園精舎。 観音に清泉、深き窯に心の苦み。古風な言葉で茶葉の誕生から終焉までを追いかけて、ひとつひとつのフレーズに凝縮されたイメージの豊饒さに酔います。 秀句の連なり、さすがの留学生さん！ な今週の裏表紙でした。